

【第 17 回パラグアイ便り】

『パラグアイにおける日本の伝統的スポーツ(武道)の存在感』

－ 現地紙の特集記事が紹介する相撲大会 －

日本ではスポーツの秋と言われますが、当国でも気温の下がる6～9月には各地でスポーツイベントが盛んに開催されています。

ところで、当国における日本人移住者や日本文化の位置付けやその存在感の大きさについて、これまで随所で紹介してきました。【第 11 回パラグアイ便り】では『日本人移住者の歴史』から、また【第 14 回パラグアイ便り】では『日本料理』から、それぞれ当国の有力全国紙の特集記事を紹介することで、彼らの視点からの理解ぶりを観察しました。そこでは「ヒト」と「料理」を通じた彼らなりの日本、しかも「パラグアイにおける日本」の捉え方が端的に示されていましたが、今回は『日本の伝統的スポーツ: 相撲』の観戦特集記事を紹介することで、「スポーツ」を通じた彼らの見方を眺めることにします。



(アスンシオン郊外の南米サッカー連盟本部ビル)

その前にこの国のスポーツ事情ですが、やはり南米諸国の一つとして、サッカーが群を抜いて国民的人気のあるスポーツで、国内クラブチームによるリーグ戦は連日大きく報道されています。選手としては往年の名 GK のチラベルト選手(GK でありながらハットトリックを達成した選手です)が国民的英雄で、日本でもファンが多いと思います。また現在のパラグアイ・ナショナルチームの監督は元横浜マリノスで活

躍していたJリーグ初代得点王ラモン・ディアス(アルゼンチン人)。今後のワールド・カップやオリンピックでの活躍が期待されます。ちなみに今年汚職問題で大揺れに揺れた FIFA ですか、この世界では良きにつけ悪しきにつけ(?)存在感の大きい南米サッカー連盟の壮大な本部ビルは首都アスンシオン郊外にあり、現在の南米サッカー連盟会長もパラグアイ人が就任しています。

話題を日本の伝統的スポーツに戻しますと、当国では柔道、空手、合気道が盛んです。たとえば空手ですが、1972 年に空真流の大峯秀俊範士が南米全体の指導者として招かれ当地でパラグアイ空手道連盟を設立しました。同氏は日本人移住社会はもとより警察や軍、その他各種の機関で師範として多くの弟子を育て、またスペイン語の教則本も出版するなど普及活動にも精力的に取り組み、空手を現在に至るまで当国で最も知名度の高い武道に育て上げました。この功績をたたえて昨年には外務大臣表彰の栄に浴しました。



(外務大臣表彰式での大峯範士ー左から4番目ーとパラグアイのお弟子さんたち)



(本年 8 月、スポーツ庁体育館で同庁ペッチ長官や本使が出席して開催された松濤館流空手全国大会)

空手は、他の会派や流派も盛んですが、たとえば本年 8 月松濤館流空手協会の全国大会が首都アスンシオンのスポーツ庁体育館で開催された際には、各都市からの代表団に加えてスポーツ庁長官も出席しました。こうした事実も当国での定着ぶりや根強い人気を示しています。

もちろん当地における日本の伝統的スポーツ—武道—はこれだけではありません。パラグアイには柔道、合気道、弓道などの協会がありますが、これらの団体は日系人社会を離れて独自に活発に活動しています。

柔道ですが、アルゼンチンで日本人から柔道を学んだビルンティル氏が 1974 年にパラグアイ柔道連盟を設立、その後ラテンアメリカ柔道関連団体の会長を歴任するなど国内外での柔道普及に貢献しました。また合気道は 1984 年にフランス人の故ブラン氏がパラグアイに初めて紹介しました。なお 1991 年に設立されたパラグアイ合気会に対し、日本の草の根文化無償資金協力で畳を供与しています。

意外なところでは弓道、その存在には驚きました。アスンシオン弓道会は 2013 年に設立されたばかり。ブラジルで初めて目にして興味を持った建築士のベラ女史が、アチェリーから転向、ブラジルの同好の士から中古の弓具を借り受け、その後も手作りや通信販売で不足を補いながら、近隣諸国で開催される短期セミナーに参加しつつ経験を培っています。実働 10 人という少数ながらなかなか熱心な人たちです。



(アスンシオン弓道協会練習風景。
手前がベラ女史)

本年 8 月に当地で「日本文化週間」を開催し、《日本パラグアイ人造りセンター》(日本政府が無償援助で寄贈した文化・芸術・スポーツ総合施設で、アスンシオン市役所所属)で、生け花展、盆栽展、映画上映、茶の湯の実演など多くの文化紹介を行いました。



(写真上：《パラグアイ日本・人造りセンター》附属体育館における武道諸団体の模範試技会)

今回は、来年が移住 80 周年というもあり、芸術分野とは別に、文化行事として 12 年振りに日本武道関連諸団体の競演による模範試技会も同センターで実施しました。ここにもペッチ・スポーツ庁長官が出席し柔道、合気道、空手諸流派、弓道の各団体が妙技を繰り広げました。



いうまでもなく彼らの活動は、資金的にも余裕がなく必ずしも専門の指導者に恵まれない中、ボランティアベースで運営されています。しかし、たとえ小人数でも「日本精神」を学ぼうとするその強い思い入れには頭が下がります。近隣諸国からの指導者来訪の機会を捉えては稽古に磨きをかけているようですが、とにかくすべてが手作り感覚なので、スポーツの原点を見ているような気がします。

(写真左：今年の大使館主催『日本文化週間』催し物案内パンフレットで武道試技会も紹介。なおパンフレット右下に日本人移住 80 周年記念ロゴが入っている。)

最後に紹介するのが、今回【パラグアイ便り】の主題となる『相撲』です。各移住地では、運動や娯楽さらには青少年教育の観点もこめて盛んに行われていたもので、この辺りは、当時の日本国内での事情と変わりません。



(写真右：公邸茶室でのパラグアイ武道各団体
—柔道・空手・合気道・弓道—の幹部)



(地域から観戦に来た観客で
大盛況のピラゴ移住地相撲場)

今回の特集記事の舞台は、「ピラゴ日本人会」所有の広大な敷地の中に建てられている屋根付きの立派な土俵と、そこで開催された南米相撲選手権大会の様相です。(なおピラゴ移住地とはいっても、今では非日系人が多数で市政が敷かれています。)



今年 8 月、このピラゴ市で入植 55 周年記念式典が開催され、物故者慰霊祭をはじめとしてバザーや夜のフェスティバルまで、演芸会や夜店も出た盛大な式典でした。

その一環として第 20 回南米相撲選手権大会が挙行政され、あわせて南米女子相撲選手権や日本岩手県チームも参加した国際親善相撲大会も実施されましたが、前述の通り近隣からも多数参集した観客は、大多数が非日系人。彼らにはもの珍しい相撲の一番一番に、日本でみるより遙かに盛り上がっていました。

この大会には当国有力全国新聞『ウルティマ・オラ』紙の記者が同行取材し、別冊付録“Vida”特集記事(2015年8月)に【東洋の力】と題する記事が掲載されました。以下その記事を読みながら、彼らの目を通した相撲という競技に対する理解や、さらにそれをこの国に持ち込み育んできた日本人移住者への思いも感じてください。



(ピラポ入植 55 周年記念式典及び国際相撲選手権大会に日本から参加した玉澤徳一郎岩手県相撲連盟会長と県代表力士。本使夫妻も列席した。)

(上田善久 大使館 2015 年 11 月)

【東洋の力】

— イタプア県に入植した日本人移住者は、勤勉さとともに得意のスポーツや文化慣習を持ち込んだ。相撲もその一つ、今年8月のピラポ入植55周年記念式典では女性選手も参加する国際相撲選手権大会が開催され、“Vida”編集部はこの数千年の歴史をもつ格闘技を観戦した。—



（“Vida”記事『東洋の力』：対戦準備が整った2人の屈強な女性力士と、彼女らの力や技量の発揮を見つめる観客）

楽団がパラグアイ音楽を奏で、信心深い国民たちが守護聖人に敬意を払うその日は、全国の津々浦々と同じ息遣いを感じる。しかし、この参加者の多くは東洋系の顔立ちで、式典広場のポスターには日本語やグアラニー語が混ざっている。今、記者はイタプア県ピラポ市の国際相撲選手権大会に来ている。

観客席は様々な民族起源の人達で満員だ。拡声器が競技者の名前を読み上げ、相撲の基本的なルールを紹介する。観客の多くは、これまでテレビで鑑賞するだけの何千年の歴史を持つスポーツの実戦を目の当たりにしている。女性選手の参加にも目を丸くする。

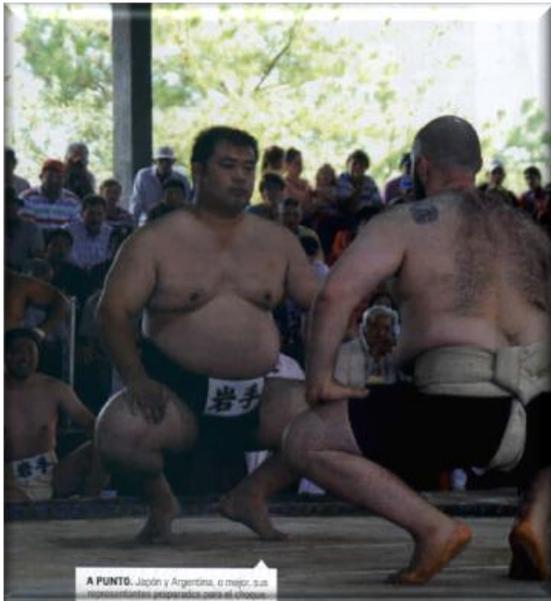
〔儀式〕

相撲選手は、立ち会いの前に土俵に塩を撒くが、これは悪霊を払い大怪我を避けるためだ。

女性相撲選手の猛々しさは男性選手に引けを取らず、その力や技量は男性に見劣りしない。目の当りでの試合観戦はテレビ画面とはまったく異なり、選手の転倒の痛み、もがきの苦しみが実感できる。



(有望な若者達：パラグアイ・ジュニア代表メンバー)



(待ったなし：立ち会い寸前の
岩手県とアルゼンチン代表力士)

“土俵(ドヒョウ)”の特徴からも危険な競技であることが窺える。伝統的に粘土で造られており、試合ごとに砂が撒かれる。これで土俵の表面が非常にざらついたものになる。

女性選手はスパッツの上に“回し”をきつく締めている。回しは日本では唯一認められた道着であるが、南米ではルールにより男性選手も回しの下に下穿きを着用する。

今回のピラポ大会は、第20回南米相撲選手権大会、第8回南米女子相撲選手権大会、第7回国際親善相撲大会を兼ねるものであり、パラグアイ代表選手の他に、アルゼンチン、ブラジル、ペルー、ベネズエラ、日本から参加者が集まった。

競技は8月1日と2日の両日、首都アスンシオンから425km地点にあるピラポ市で、日本人ピラポ入植55周年記念式典行事の一つとして、物故者慰霊祭や、ピラポ市制25周年記念ともなるピラポ・エクスポー地元農産品の大展示会—などととも開催された。

〔到来〕

大多数のパラグアイ国民にはなじみの薄いスポーツである相撲に話を戻そう。相撲はパラグアイ国内で半世紀の歴史があり、決して新しい種目ではない。今最も普及しているスポーツ2種目と比較しても、屋内サッカーとは同じくらい以前から、またラグビーが国内で組織される何年も前からパラグアイに存在している。

この日本起源の競技のパラグアイでの歴史は1962年、厳密には1962年8月15日にさかのぼる。Masaki Tanaka(田中正記)が、1961年にパラグアイに到着、その翌年ココイタプア県ラパス移

住地で初の相撲試合を開催した。Tanaka の甥や姪は5年前にすでに南部地域に移住しており、彼がこの地に定住して相撲開催の前提が整った。その理由は、Tanaka はこのスポーツの審判であり、彼の親族は相撲の熱心な信奉者、実践者でもあったからだ。

第一回大会はラパス移住周年記念行事の一環として開催され、それを契機にパラグアイ相撲協会が結成された。以後、ほぼ毎年、ラパス、ピラポ、イグアス、アスンシオンの各市出身の選手が参加する競技会が開催されており、次の国内選手権大会は今年12月に開催予定だ。

パラグアイ相撲協会は南米相撲連盟に加盟しており、今までに南米相撲選手権を主催した実績のある優れた団体だ。

前回主催は5年前のピラポ入植50周年記念式典の機会だった。その大会で、初めてパラグアイは女性チームを出場させた。

その結果は？と問われて、「とにかく経験を積みました。」と、パラグアイ女性相撲の先駆けチーム・メンバーの Carmen Nakamura は答える。アルゼンチンやブラジルの“一日中練習している”経験豊富な選手と対戦したが、パラグアイ選手はこの南米選手権のために練習を始めたばかりのまったくの初心者だった。



(女性の対戦。左青色ブラジル選手と右黒色ベネズエラ選手。)

【勇気】

Carmen は、パラグアイ代表を努める夫 Akio Nakamura (中村明雄) のおかげで相撲に巡り会った。初心者ならではの情熱で練習を始め、ナショナルチーム編成のために隣のオエナウ市から女性4人の同志を集めた。



(転倒：勝負は一瞬だが激しく、転倒は痛みを伴う)

初参加でパラグアイ女性チームは勢いを失い、その後の南米選手権では観戦するだけだった。しかし本大会を通じてやる気が蘇り、女子相撲を再開すべく他の女性たちを奮起できるものと Carmen は確信する。

簡単なことではないが、彼女の気持ちは理解できる。「この競技は怪我が多い

のでみんな怖がっています。だから、今年は女子相撲チームを組めなかったのです。」

相撲という試合様式は、競技に必要な力に見合った身体を維持するために厳しい規律や集中力が要求される。「相撲に臨む決心をするには、とても勇気が要ります。」と Carmen は付け加える。

規律は厳しいが相撲に必要なのは基本的事項ばかりで、意欲と体力の維持だけだ。背が高く、肉付きがよく、体重が重い必要はない。もちろん技量が均衡していれば力と重量の大きいほうが有利だが。

ルールも至って単純。土俵(ドヒョウ)上では足裏だけの接地が認められる。他の体の一部が地面に接触するか土俵から足が出れば、その選手の負け。回しが外れたり、殴打したり、相手を脱臼させても負けである。

土俵の境界は米の縄“俵(タワラ)”で定められ、その中央には二本の線が引かれている。これは仕切り線と呼ばれ、“力士(リキシ)”はここで構えを取る。

土俵上は一人の審判が仕切り、土俵の外の四辺には4人の審判が座る。試合はだいたい20秒以上は続かない。開始から3分が経過しても勝負がつかない場合は、試合を中断し、すぐに再開する。こうして勝者が決するまで試合は続く。

勝負が3分以上続くことは滅多にない。主審の判定に疑義ある場合は、他の4人の審判と審議して勝者を決定する。

〔学習〕

相撲に興味のある者はクラブか学校に行くといい。また後援者の支援を受けることもできる。すべてのプロ相撲選手(パラグアイ相撲はアマチュアだが)にはスポンサーがつく。

パラグアイ相撲協会は日系人を越えた相撲の普及を目指している。年に何度か首都スンシオンやその近郊で開催される日本文化愛好家主催の各種行事、たとえば、漫画、アニメ、コスプレなどのフェスティバルを利用して、相撲のデモンストレーションを後援してきた。

現パラグアイ相撲協会会長の Masatoshi Tanaka(田中政寿)はパラグアイに相撲を導入した

Masaki Tanaka(田中政記)の孫で、南米相撲協会の副会長でもあり、相撲が正式競技として認知されるようパラグアイ・オリンピック委員会に働きかけている。

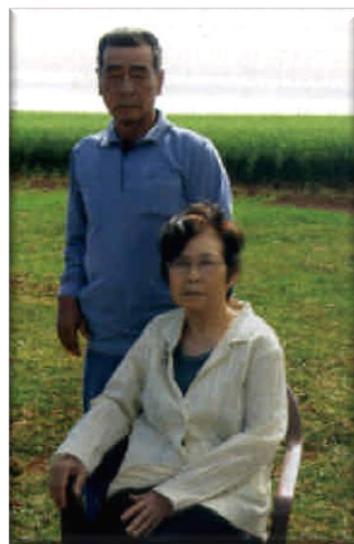
彼の目的は、競技者の数と質が向上するようパラグアイでの相撲の基盤を強固にすること。やがては、移住者が果たしてきた貢献に相撲普及の貢献も加わるだろう。まさしく、これがパラグアイにおける日本の活力なのだ。

=====

《以下は記事中のコラム》

〔文化の発祥地〕

エンカルナシオンから幹線道路を 20Km 走るとここに着く。60 年前、今ではラパス市街区にある富士移住地に入植した日本人移住者を迎えたのは未開拓の原生林であった。南は鹿児島、北は北海道からやって来た人達で、旧兵士もいた。より良い未来を約束されてパラグアイにやってきた人たちだ。Kunie Sasahara (笹原邦瑛)と Tsutomu Satake (佐竹勉)は 1957 年に入植し当国南部の初期の発展に寄与した、存命中の移住先駆者だ。富士の墓地で開催される式典“慰霊祭”では、子孫達が故人を偲ぶ。今年の式典は、初期の日本人移住者の定住を手助けしたパラグアイ人の追悼も兼ねている。



日本に戻ったり他のアメリカ大陸諸国に散らばった仲間も多かったが、1959 年入植 Satoshi Ando(安藤哲)のように、イタプアの肥沃な大地に根を下ろした人もいる。彼らは母国の文化と勤労精神を持ち込んだ。そして生まれ故郷の日本を訪れた時に感じた唯一の望郷の念は、パラグアイに向けられていた。

=====

(翻訳: 上田善久・石田健人 大使館)